
辻火

田久保英夫



辻火^{つじび}

一九八六年三月二〇日 第一刷発行

著者——田久保英夫^{たくほひでお}

© Takubo Hideo 1986, Printed in Japan

発行者——野間惟道

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京〇三—九四一—二二(大代表)

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——大製株式会社

定価——一六〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

ISBN4-06-202600-7(0)

(文1)

目次

辻火 五

菖蒲 四三

檜垣 八一

浮標 一三七

辻

火

装幀・山岸義明

装画・織田広喜

辻

火

路地の奥に、赤い光が明滅している。その明るさ暗さのたびに、軒下の白粉花の脇に立っている女の影が見え隠れする。女だけではない。屈んでいる坊主頭の男も、子供らしい二三人の顔も浮きたっては消える。

不意にその影の間から、赤熱色の小さな光が散る。線香花火だ。路地の入り口から見ると、路上は暗く、その焰は鋭く鮮かだが、頭上の狭い屋根ごしの空は、まだ夕方の碧さを残している。

その長身の黒い服をきた女は、スミコではないか、と一瞬眼をこらした。十年あまりも会っていないが、高校生の頃からスミコは上背があつた。しかし、スミコでなくても、今日はどうでもいい、という気にもなっていた。

もう一時間あまり、小路を右へ折れ左へ折れして、家を探すのに疲れていた。深夜から午前中まで、都心の高層アパートで仕事をして、雑誌のお使いに渡し、午後は右足の骨折で入院している母を見舞い、それから夕方すこし涼しくなったのを見て、はるばるこの下町まで出てき

た。母にこの前から頼まれたことを、催促されたからだ。右脚をベッドの上へ吊りあげられ、この暑さで余病も出てきそうな八十二歳の母親に、つよく急かされると、何となく切迫した気持ちになる。

しかし、どうやらタクシーできたのが、悪かったようだ。高速道路を下り、旧街道へつづく墨田川の大橋をわたり、川の近くを沿うように下流の方向へ折れた。運転手に目当ての町の三叉路を指示してあったが、その前で停ってみると、あたりは以前の記憶とまったく変っていた。道幅はアスファルト舗装されて広くなり、目の前に十階以上もある公団住宅が建っている。

ほんとうはこのあたりは、自分自身も育った馴染みの町の筈なのだ。生まれたのは浅草のはずれだが、二歳の時に祖父といっしょに川の手前側の町へ移り、小学校もそこで出た。こちらの町には伯父や叔母、そのほかの縁者もいて、子供の頃は始終大橋を渡り、遊びにきて、まったく自分の領域と思っていた。しかし、今いきなりこの街角で車を降されると、感触が違っている。三叉路の一つは、造花の飾りのついた商店通りのアーチで、店先にはそろそろ夕餉の買い物客の姿も見えるが、こんな賑やかな店舗の記憶はない。国電の駅前には商店街もあったから、そこからくれば、こうして町を逆様に辿るような迷い方をしなくてすんだらう。そう思い

ながら、とにかくこの通りを行けば、駅前へ出る気がして、アーチをくぐった。

商店街は行くほど、意外に長くて、いくつも四辻があり、またわずかな間口の店並に分れたりしているが、ふと丁字路に出た時、そこに遠い記憶が朧ろに蘇るように感じて、その小路を折れた。けれども、それが間違이었다。

狭い道には燻くもんだ窓格子の下に、ハツ手やオモトや朝顔など鉢を並べた家がつづき、その間にぼつんと果物屋だの煎餅屋だのが、店を開いている。母の妹、つまりスミコの母親は中年で夫に病死されてから、やはりここで家業の茶屋をひきつぎ、姑と子供を養ってきた。むかしはその茶屋も、けっこう繁盛したが、こんなに商店街が発達し、駅ビルのテナントもできたのに、商売になるだろうか。そう思うが、どうやら路地奥の小さな店が成り立っているのも、この界限の不思議さだ。

しかし、少しずつ夕影が濃くなって、灯りの目だつ店さを辿ってみても、叔母の茶屋はない。小路をつき当り、また小路を曲ったりするうち、いよいよ本物に道に迷ってしまった。手帖に叔母の家の住所も、電話番号も控えてあるが、まわりの路地に住居表示板はない。一軒の家の表札に、ようやく住所が書いてあって、目ざす町内を歩いていることはわかるが、番地が離れている。電話をかけたいと思っても、赤電話も見あたらない。

けれども、そうして道を歩くうち、これこそ子供の頃からの郷土だ、という気になってきた。東京という大都會のなかにも、郷土はある。子供の頃、年中ここの親戚の家へ出入りしていたばかりでなく、橋むこうの自分の生家も育った家も、同じ小路の奥、同じ土壌の世界だ。ただあの頃は、自分の掌を指すようにこの狭い道の迷宮を走り廻れたが、今は町の変化と自分の年齢のために、それを失ったにすぎない。

こう思うと、叔母の家を探すのがどうでもよくなり、むしろ不安な気持で路地を眺めた。軒と軒の両側から迫るような二階家も、ときにモルタルの外壁に変えたり、アルミ・サッシを嵌めたりしている。しかも、その家屋と家屋の間は、十センチほどの隙間しかなく、こんな外壁を塗った職人は神業と思えない。

小路にすぐ接した格子戸や窓から、人の話し声、笑い声が間近に聞え、揚げ物の匂いなども流れ出てくる。戸口には天津スダレやカーテンが下っているが、半坪ばかりのたたきのすぐむこうから、部屋の電灯が射し、盆提灯が下ったり、男女の家族が食事したりするのも、いや応なく覗ける。それを見ると、言い知れず怖れさえ感じてきた。

その路地の入り口まできたのは、遠くこんもりつき出た櫓の梢が見えて、それがかつて遊んだ寺社の境内ではないか、とまず思ったからだ。そこへ行ってみると、やはり古い山門に見覚

えがある寺で、ここから道の方向を辿りなおして、再び小路へ入ると、今度はたしかに記憶にある路地口の石塀に出た。

「こら、だめ。一つが消えないうちに、別の花火をつけるのよ。マッチがもうないんだから……。」

女は長く縮れた髪を揺すり、子供のひとりに言っている。その喉の粘膜が、いつも少し紅く充血しているような、潤みのある声はスミコだ、と思った。

確かめるため、人影を廻りこむように近づいて、顔を見ると、途端にスミコと眼があつた。娘はすぐこちらが誰かわかつたらしく、わずかに眉根をよせたが、驚いた表情もしない。それから、こつちを見たまま急に眼を柔らげて、

「ライター、お持ち？」と訊いた。

「ああ……。」

ズボンのポケットに、煙草と一緒に押しこんだ百円ライターを出して渡すと、スミコはちょっと頷いて、花火を囲む連中に、

「さあ、これでつけなさい。」と手渡した。

二人の男の子に一人の女の子。それに、頭を丸刈りにしたＴシャツ姿の青年が、四角いブリ

キ罐の上に無言で腰かけている。空手でもやりそうなその男は、どこか小学校時代に会った面立ちが残っているから、スミコの弟だと判断できた。私立大学の学生、と聞いていたが、スミコとは母親が違うせいかな、まったく似ていない。

そばには竹の縁台があつて、スミコの革のハンド・バッグとハترون袋がのつている。娘はよく見ると、流行の頭陀袋のような黒いシャツに、肩から裳裾まで白と灰色を縫い合せた長いスカートをはいている。勤めの帰りのようだが、そんな今様のお洒落な服装が、大柄な軀に似合っている。

髪はカーリー・ヘアというのか、細かに厚く渦巻いて、二十八の齡にしては若づくりすぎるが、それも顔の方が以前と比べて、どこかフケたせいだろう。

高校生の時は眼も一重瞼で細く、頬や唇にふくらした可愛さがあつたのに、今は瞼も二重に整形でもしたのか、眸が大きく影を帯び、頬の肌はひきしまっている。しかし軀は前より肉づいて、成熟した色つやが見えるが、何となく世間の埃の染みた感じも漂う。

「お袋、うちにいるわよ。」

スミコはうしろの煤けた家屋を指したが、そこには以前きた時と違う鉄階段がかかり、上り口の奥に、勝手口らしいガラス戸が閉まっているきりなので、咄嗟にとまどつた。

すると、スミコは機敏に肩を翻して、その家沿いに角を曲った。ついて行くと、そこが茶店の表口で、見覚えのある古びたガラス戸が四枚閉まり、電灯も消えている。

「お袋、関節が痛んで、店休んだの。」

スミコは手荒く戸をあけると、紺のれんの下った店の奥へ、

「お母あちゃん……。」と声をかけた。

そうすると、やや間があつて、緩慢にのれんを分け、叔母のヤエが栗色の瘦せた顔をのぞかせた。

「まあ、まあ。」

ヤエは臉を皺でくしゃくしゃにして笑い、慌てた不器用な動作で、上れ、と言うようにのれんを大きく掻きあげた。

ガラス戸の右側には、緑茶の罐や急須などを並べたショウ・ケース、左側には各種の海苔の箱や罐を入れ、ほうじ茶のパックなどをつんだケースがある。その間の狭いたたきから、板の間へ入ると、奥行二間とない正面の壁につき当りそうになる。棚にはいろいろな銘柄の茶の大罐が並んでいるが、店の中はどこも雑然として埃っぽい。

スミコはついてこない。のれんを入りながら、ちよつと背後を見て、小路へひき返したの

を感じて考えた。さっき、なぜこちらの顔をひと目見た時、驚かなかったのだろう。なぜ即座に叔母に用とわかったのだろう。ことによると娘は、母の骨折の前、ヤエが電話で頼んできた用が、自分のことだと察して、避けたのかも知れない。

六畳の室内は蛍光灯の力が弱まっていた、うす暗い。天井や柱、壁ぎわの茶簞笥や仏壇まで、古く燻んでいるせいもある。仏壇には果物と餅菓子が供えられ、その前に据えた盃蘭盆の水色の灯籠だけが、涼しげで真新しい。

ヤエが卓袱台の前に出してくれた座蒲団に坐りながら、どこか以前きた時と勝手が違うのを感じたが、それは障子のそとにあった階段が見えないため、と気がついた。そこは台所だが、階段がとり払われた分だけスペースが広くなり、白い冷蔵庫が置いてある。そのむこうに、さつき道から見たガラス戸が外の光を透かしている。どうやら二階のスミコや弟の部屋へ、外から独立して出入りできるように鉄階段とつけ換えたらしい。

ここへこの前きたのは、青果市場にいた伯父の法事の後だ、と思い出した。やはり夏の末で、帰りに母と一緒にここに寄り、みなで掻き氷を食べた。スミコは高校二年で、勉強もよくできるというが、どこか意識した人なつこさがあり、墨田公園のプールへつれて行ってくれ、と言った。そんな気働きは、スミコが叔母の血をひかず、夫が近所の寡婦に生ませた子で、叔